



テスト問題のつくり方

—学習の成果（身に付いた力）をいかに測るか—

元全国中学校社会科教育研究会会長 赤坂寅夫

その一 テストの意義 —テストも指導の場—

今回のテーマである「テストのつくり方」に関しては、「中学校 社会科のしおり」2015～2016年度1～3学期号で計6回にわたって「定期テスト作成講座」コーナーで、佐野金吾先生が著していらっしゃいますので、是非そちらも参照していただきたいと思います*。今回は地理的分野のテスト作成における基礎・基本という観点から述べます。

前述の「中学校 社会科のしおり」（2016年度1学期号）の定期テスト作成講座（1）では、「テストのねらいは授業を通して生徒一人一人がどのような学力や学習態度を身に付けているかを把握し、その後の指導に生かすことにあります。」と示されています。先生方からすると周知のことで当然のことと考えていることでしょう。これに私の考えとして、テストも指導の場面と捉え以下の二点を加えます。

一つ目は、**テスト返却も重要な指導の場面と考え、丁寧な解説を心がけます。**特に中学校の定期考査に慣れていない1年生の時期には丁寧なポイント解説が、生徒にとって大切な振り返り（復習）の場となり、それ以降の授業での学びにつながります。現行の教育課程においてはテストでは、「関心・意欲・態度」の観点以外の三つの評価の観点を問題ごとに示していることと思います。「なぜこの問題が資料活用の技能を問う問題か」、「示された資料のどこをどの

ように読み取るのか」、「示された資料のどこを読み取ってどのように考え、どのように表現するのか」など、「資料活用の技能」、「思考・判断・表現」の観点の問題については、授業の場面を振り返りながら解説することで効果的な復習の場となります。また、読み取りの視点や考え方を加えた模範解答を配布したり掲示板に貼ったりすることも工夫の一つです。これらは生徒・保護者に対する学校・教師の説明責任の姿勢として大切なことです。

二つ目は、「知識」を問う問題の解答として、**記号選択ではなく極力「地名」「用語」を書かせること**です。すなわち、直接書くことで定着を図る場面の一つとすることです。「知識」を問う問題では、解答時間や採点時間短縮のためにアやAなどの記号で答えさせることが多いかと思います。しかし「ナイル川」「関東平野」などの自然地域名称や地名や国名、「カルデラ」「混合農業」などの地理用語については、手で書く作業を通して定着を図りたいものです。またテスト返却で誤答を正しい地名・用語に訂正することで目と手で定着につながられます。

ポイント①



テストを学習の一場面と考え、
テスト返却を意義づけること

その二 生徒の立場に立った問題づくり

私が若い頃はワークシートやテストの地図や図、グラフ等を手書きか原図を縮小コピーして

貼り付けて活用していましたが、最近の若い先生方はICT技術に長けていて、インターネットから引用し、レイアウトも工夫して活用し、都道府県の高校入試問題のような問題を作成しています。その素晴らしさに感動しますが、中にはせっかくの工夫が生かされていないものがあります。それは、地図や図、写真資料が小さかったり、細かすぎたりして肝心な部分が読み取れない資料を活用しているものです。教師としては、授業で活用したのだから小さくわかりにくくてもこちら（作成者）の意図はわかっているだろうという一方的な思い込みから出題しているものと考えられます。社会科のテストは、資料を読み取ったり、読み取ったことを基に思考し表現したりする問題が出題されます。その基となる資料が読み取れないのでは、生徒の力を正しく評価することはできません。また資料が適切であったとしても、その問いかけの内容あるいは問いの意図が生徒に通じない内容では同様に正しく評価することはできません。生徒の目線で、資料や発問を見直すことが大切です。

ポイント②



生徒の目線で資料や発問を見直すこと

その三 評価の観点に基づいた問題づくり

かつて文部科学省の元教科調査官の先生が「授業で活用した地図や図、写真資料等を定期考査で活用し、読み取らせたり思考させたりしても、それは授業の記憶を問う問題だから知識・理解の観点での問題でしかない。」と話されました。この意味では、高校の入試問題のように初出の資料を活用することが正しい観点別評価と考えられます。しかし、経験の少ない若い先生方にとっては、全問をそのような問題とする

作成時間がとれないなどの課題がありますし、やはり授業で行った資料の読み取りや思考の活動がきちんと生徒に身に付いているかを知りたいところだと思います。その際出題者としては、「資料活用の技能」、「思考・判断・表現」の観点で出題したつもりでも、はたしてその問題が意図した観点で作成されているかが重要な点です。評価の観点別の問題作成の基本について、帝国書院発行の「中学生の地理ワーク」（以下、地理ワーク）掲載の図版を用いた出題例を紹介したいと思います。



〔問2〕 図2の雨温図を見て、東京と比較したロンドンの気候の特色を、「気温」と「降水量」の語句を使用して説明しなさい。(資料活用の技能)

〔問3〕 〔問2〕で読み取ったロンドンの気候の特色の理由を、図1を参照して、下のキーワードを使って説明しなさい。(思考・判断・表現)
〔緯度 暖流 偏西風 西岸海洋性気候〕

この事例では、〔問1〕は単純に授業で扱った知識・用語を問う問題です。〔問2〕は東京とロンドンの雨温図の比較から西岸海洋性気候の特色を読み取る問題です。〔問3〕は西岸海洋性気候の特色の要因を北大西洋海流や偏西風と関連付けて考えているかを問う問題です。もし図1がなく図2の雨温図だけから西岸海洋性気候の特色の要因を思考する問題とするなら概念を理解していないと答えられない、よりレベルの高い問題となりますが、授業での学びの成果を測るには上記の問題構成が一つのモデルになると考えます。

問題例2 「中部地方の農業」

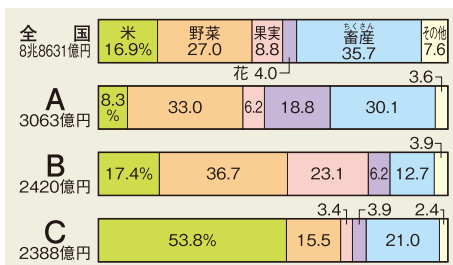


図3 中部地方のおもな県の農業産出額 (2015年)
(地理ワーク日本編p.45③)

〔問〕 図3は新潟県、長野県、愛知県のいずれかの農業産出額を示している。A,B,Cにあてはまる県名を答えなさい。(知識・理解)

この問題は、各県の農業の特色を理解しているかを問う問題ですが、特色を多面的に記憶していないと答えられないレベルの高い知識問題です。同じ資料を活用して異なる観点での問題

をつくることもできます。

問題例3 「中部地方の農業」

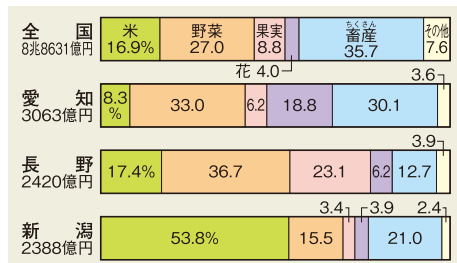


図4 中部地方のおもな県の農業産出額 (2015年)
(地理ワーク日本編p.45③を改変)

〔問1〕 図4を見て、それぞれどのような農業生産が盛んか、各県の農業の特色を簡潔にまとめなさい。(資料活用の技能)

〔問2〕 ①新潟県で米作りが盛んな理由を地形・気候の特色と関連付けて説明しなさい。

②長野県、愛知県ともに野菜の生産が盛んですが、気候の違いに着目してそれぞれの産物の違いを説明しなさい。(①②ともに思考・判断・表現)

問1は、前問のように各県の特色を覚えていなくても他のグラフとの比較から特色を読み取れる問題で、解答レベルは前問より易しいですが、各県の農業の特色を示した三つの文章を選択肢化するとさらに易しい問題となります。

問2は、授業で扱った農業の特色の背景を振り返らせて考えさせる問題です。①に比べて②の問題は違いを気候と産物の二段構えで考えるので、ややレベルが高い問題といえます。

テスト問題づくりには、授業で生徒にどういった力を身に付けさせようとしたのかという授業者のねらいと 생각이反映されます。

ポイント3



どのような力を身に付けさせるかを明確にして問題づくりをすること

※指導者専用サイトでご覧いただけます。